

ライトアップが 都市を蘇らせる 東京駅丸の内駅舎

田井中麻都佳

昨年末から、東京駅丸の内駅舎のライトアップが以前よりも明るくなったのをご存知だろうか。東京駅丸の内赤レンガ駅舎は、一九一四年、明治期建築の開拓者である建築家・辰野金吾の設計によって建てられたもので、ネオバロック様式を採用した代表的な日本の近代建築の一つである。ライトアップは、すでに駅舎の痛みが激しくなっていた一九八六年一二月から始まったもので、国鉄からJRへ移行するにあたり、先行き不安な国鉄の人々の心を明るく照らすという目的があったのだという。照明デザイナーの第一人者である石井幹子氏の手によって、やわらかで気品ある光を纏うことで見事に息を吹き返した駅舎は、取り壊しの運命を逃れ、改修を経て、現在では東京の玄関口として堂々と佇んでいる。

さて、その駅舎が明るくなった。理由は、丸の内の再開発が進み、周囲が明るくなったことで、以前の照明では駅舎が目立たなくなってしまう

からだという。確かに、新しい丸ビルができてからというもの、丸の内駅舎は以前よりもほんやりと暗く沈んで見えていた。今回のライトアップの見直しによって、横に延びる駅舎が全体的に明るく浮かび上がり、ぐんと華やかになった。やはり東京の顔である玄関口はこうでなくっちゃ、と思う。変な話だが、女性の多くは、ここのトイレの鏡は美人に見えるけれど、あそこオフィスの鏡はブスに見えるなんて経験があるだろう。その原因は照明の違いによるところが大きい。さらに、同じ鏡でも、隣に美人が立てば自分はいくすんでしまう。負けじと化粧直しにせいが出るといえるのだ。たとえば悪いが、東京駅のライトアップの見直しも、駅周辺の建築物と張り合った結果であり、丸の内全体が元気になった証しといえるだろう。

しかし、このことを手放しで喜んでいいのだろうか、とも思う。毎日、東京に通いながらも、私が横浜に住む場所を選んだ理由の一つに、横浜の

夜景があるのだが、横浜の夜景が魅力的なのは、東京ほど街が明るすぎないからじゃないだろうか、と思うのだ。横浜では、市をあげて街中に点在する神奈川県立歴史博物館や横浜開港記念会館など歴史的建造物のライトアップを実施しているのだが、街とのコントラストがとても美しく、ドライブの途中に思わず目を奪われることがある。それだけで、この街に住んでよかったな、などと思うのだから、美しいイルミネーションには、人を惹きつけ、都市を活性化させる働きがあるのは間違いないだろう。

ところが、東京のアミューズメントパークのような光の洪水に晒されていると、逆に光に感動しなくなってくる。このままだと、東京タワーさえもいずれば照度の増強が検討されるようになるんじゃないだろうか、と心配になる（ちなみに、編集部Yさんは、西新宿のビルの灯に惹かれて近くに住んでいる。皆が働いていると思うと感動するのだそうだ。光の感じ方は人それぞれ



Photography by Masatoshi Sakamoto

れなのですね。

光を意識させるのは、じつは影であり闇だ。

先日、あるNPO法人が主催する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」というイベントに参加した。これは真つ暗闇の空間を数人の健常者とともに盲人のナビゲーションで歩くというもの。光がいつさいない世界を、ナビゲーションの声、仲間の息遣い、あらかじめ空間に設置されたランドスケープの起伏、香り、手触り、空気の流れなどを頼りに歩くのである。

最初は恐怖が襲ってきて、何も見えないのにひたすら目を凝らそうとする自分がいたが、やがて、視覚以外の五感を総動員することで、なんとかゴールまで辿りついた。それでも、闇から解放されたときの安堵感は、いかに自分が毎日視覚に頼って生きているかということを物語っていた。しかも、現代の都市は、ますます視覚に依拠する傾向が強くなっているように感じる。

谷崎潤一郎の『陰影礼賛』を引き合いに出すまでもなく、都市の美しさは光と影のコントラストによるものである。とかく、光のみならず美や安全性、快適性に目を奪われがちだが、光や光技術によって奪取されてしまったものについて——光害やエネルギー問題だけでなく、私たちの五感や体験についても——もう一度見直してみることが大事ではないだろうか。なぜ今、若い女性の間で蠟燭の明かりが人気なのか、なぜ蛭狩りが楽しいのか、なぜ精霊流しは美しいのか、といったことを考えることが、新しい技術の糸口に繋がるかもしれない。

参考文献 石井幹子編著『光の21世紀』(NHK出版)